



忠婦  
美談

薄衣草紙

六

遠13  
959  
白止



門遠 13  
號 959  
卷 6

本清

美婦 薄衣 草紙 卷之五

兼題

寄水觀喜

江戸

津川亭著述

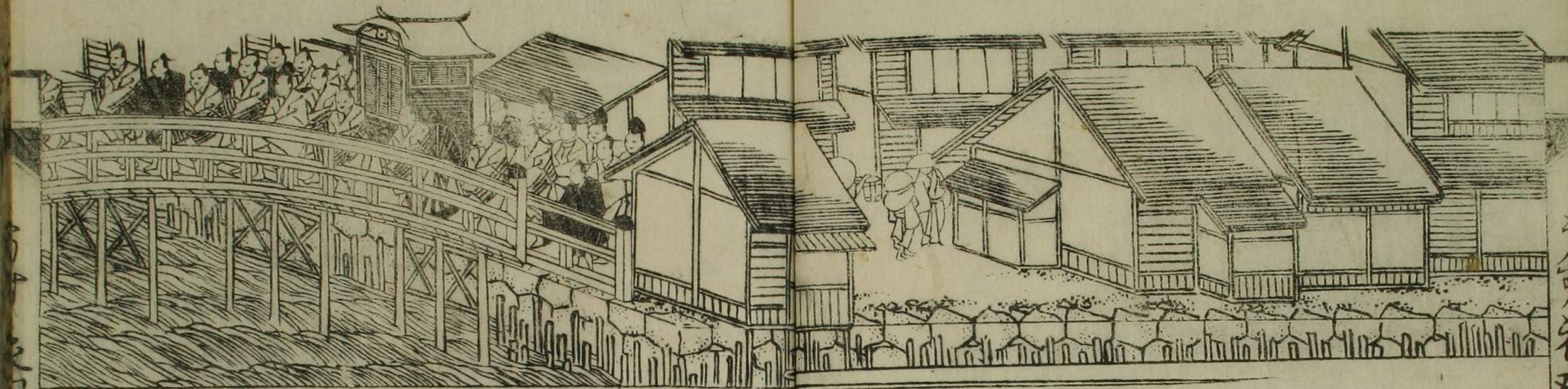
爰よ茶藤の方おん舎兄花園右府雅行公のあはれ死  
内裡より退去の跡より一條通堀川戻橋のあはれ  
よるある苦や免させめくど叫びつ走り来るその  
あり雅行公奥のうらより見えぬよその行状狂人  
おぼく。荒くは法師の衣を脱ぎ破きとて地を  
みながら眼をえおつ。やがて雅行公の通をせり人路乃  
備よ踏入り神託ありやせめりかの是その己前交の妻  
みて人を殺し。牙の寄辺るたす。磋砧の禪院入りて僧



とりのゆひが。故大納言諸実々の姫君のりせせりふ  
 檜の家室を。桂山政則々一持出まじ。数々の貴令一  
 換ふふう。と傳く。再び悪念を發し。彼人の忍び  
 とつと深州の里へ尋ねり。姫を子ごめふ。一室  
 と奪ふんとし。忽地梅の宮の神罰に及ぶ。狂人と  
 りて。おのまこと罪を訴へる。早く此悪僧が首  
 と切く。その罪を弘く。おそ恐る。神の咎めより。  
 五拜焼がてく。あま絶難や。ゆるさせり。と抱ひ  
 止む。雅は云。おん裏のうらより。此始終を見せ  
 其者狂人よ。おれさう。い。ども中條におか。あ  
 せり。あまのあまは。か。か。百捕へ。武士お令。

て。幾びも。弘く。ひ。は。彼が。い。と。後。と。い。は。  
 遠の。さ。り。い。ふ。先。獄。み。ぞ。下。り。る。さて。政。則。の。悪。謀。  
 ち。を。捨。お。き。か。し。と。て。雅。は。公。の。發。言。よ。う。て。云。々。  
 一。統。の。詮。義。と。り。り。象。後。一。災。い。け。ま。じ。す。ま。り。ら。  
 天。聰。は。達。一。た。て。す。つ。り。け。ま。じ。帝。由。去。り。一。以。破。儀。  
 野。の。ほ。狩。の。日。川。悟。道。寺。よ。お。ひ。く。茶。葉。麩。の。方。乃。  
 讀。置。一。詠。奇。の。ゆ。り。り。政。則。の。悪。行。を。悟。り。の。ひ。  
 一。つ。も。さ。ら。り。の。り。り。の。敬。慮。る。り。一。ふ。抵。奏。一。  
 一。う。て。詳。は。新。一。長。是。大。き。よ。お。と。後。さ。り。て。その。罪。  
 と。弘。令。あ。り。一。と。ころ。政。則。と。い。は。る。敬。慮。あ。り。あ。ら。ぬ。  
 勅。使。と。偽。り。家。室。と。あ。づ。ら。ん。と。且。諸。實。率。去。り。

虚に繁しく。家室は奪ひとりて、きしむを。兵卒を以て  
彼館を放火せし。先刻へ家隸郎黨紙敷害し。却て  
諸実の妻子。帝と恨みして、自ら家よ火を掛  
落し失し。敵國を圍中し。その牙技流の家としし。も  
幸家と倒せし。結痔。その罪めりきよあはれとのども。  
寛仁の沙汰としし。政則と流路。ゆきぞ流しことり。我  
真菘の前も。その罪舎兄政則は等し。しりとも。君  
恩瓜承りし。身なれむし。尼とまし。しり。小岩倉若  
邊りよおひし。閑居をさし。えりひる。こそ青熊を  
重罪の者なれども。狂人ながらおのれが罪。或自ら訴ふ  
る。依り。死罪一統を救ひ。鬼鬼が流し。き流せられ  
り。こそ其のちか。しり。ける。も勅定あり。り。朕  
不明し。し。斯る禍ひを引出せり。今この分。明けられ  
し。も。諸実が家系。あつ。も。断し。お。べ。但し  
彼ハ女児の外。相統と。き。男子。は。り。し。や。と。諸卿  
よ。と。せ。た。し。し。り。が。そのせ。た。め。右大臣雅行。と。り  
り。が。取。あ。ど。勅。答。よ。お。り。れ。り。ん。こ。よ。と。り。諸。実  
存。生。の。ま。だ。り。女。子。一。人。あ。り。家。継。び。き。男。子。ゆ。め。は  
し。り。中。納。言。為。俊。の。次。男。義。名。若。と。乞。請。け。養。子。と。し  
女。児。よ。め。あ。せ。ゆ。り。ん。縁。由。を。為。俊。と。り。か。り。を。め。よ。約。し  
お。た。ゆ。ひ。ぬ。り。し。も。諸。実。未。終。よ。の。し。り。ひ。さ。その  
外。親。族。の。ら。は。女。児。へ。め。あ。と。り。ま。和。合。の。者。も。お。り。し

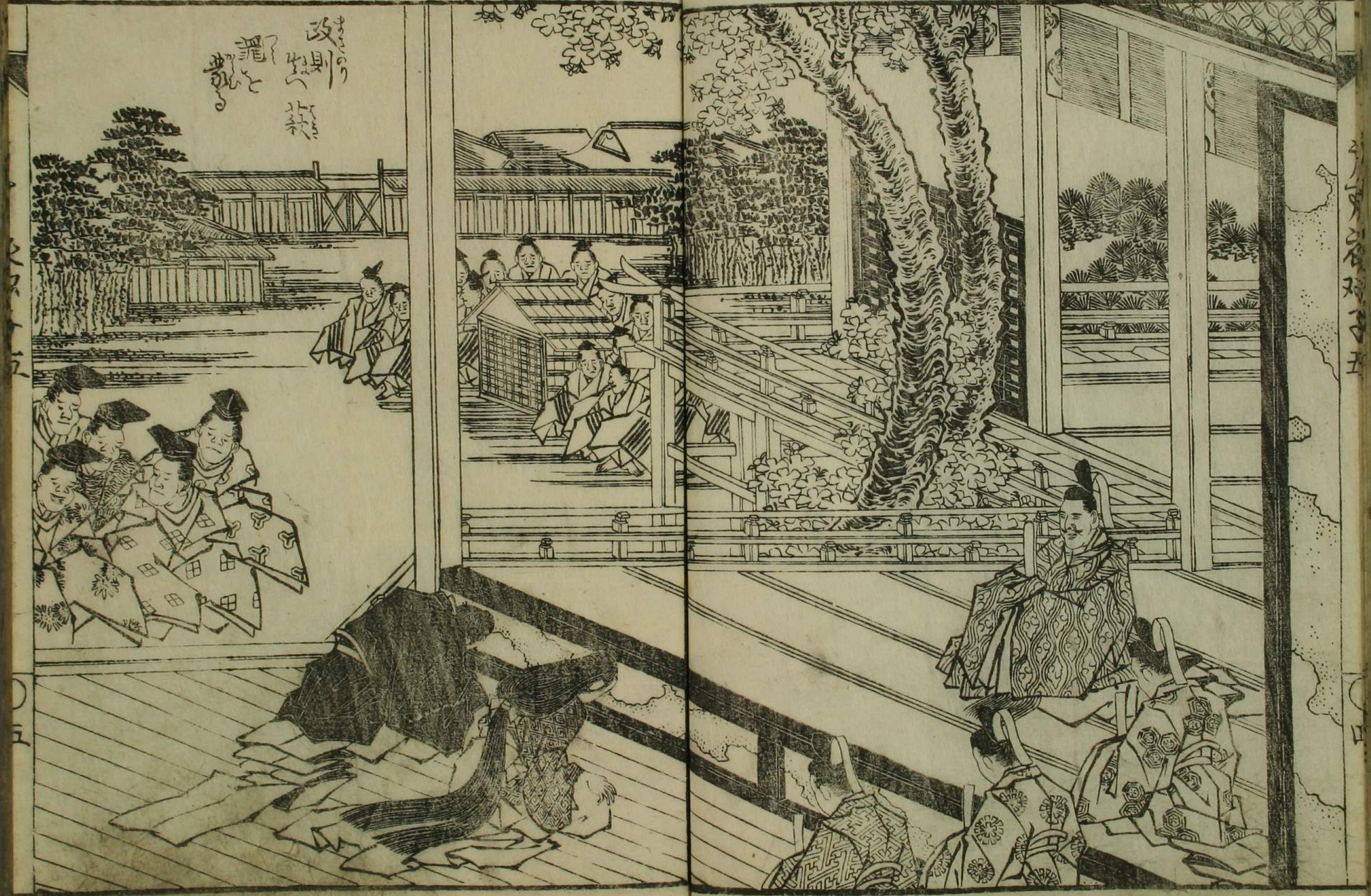


うすねのり



ま甲のり  
青鯨狂気  
このれ  
悪のり  
仲る





政則  
羅  
世

分  
文  
後  
子  
五

とてま。挿ひしうをうらみく。この島の長嶋果一  
 りれ中よんうらむ。青熊うらむ悪徒のうらむ。深草  
 の里よも止りかへ。喜曾六がうらむひとく。井出の里  
 るる徳大夫が方よ舎紙接しひひる。あつうよは徳さまが  
 先祖も。素卿士あつう。回家るるや多村里あてもうらむを  
 いやう。世へ下りぬまども。今もあつうを豊よまひ  
 なる。喜曾六が妻の兄るりけま。うらむを伴ひまを。  
 始をうらむを詳よりのかへ。あつうの舎り頼りけま。  
 徳を夫安くも羨りつ。殊よ當所ハ先先祖諸兄公の住  
 せのひー。田原るうらむ。あつうらむも因縁ありてその後裔の  
 かへ。あつうのあつうらむ。あつうらむ。あつうらむ。あつうらむ。

やうやある家貧しといども。倉庫よ絶え肥田人並よ  
 持ぬま。うらむとやうひまのうらむよ年と算へま。い  
 と休むひまひて。時のあつうを侍せま。いと教へま。  
 見えけま。喜曾六も安堵のありひとみく。人このおん  
 上をうらむ。深草くぞあつう。茶藨の方姫君も。  
 うのまある。人の言茶よ葉。あつうのひー。あつう。あつう安  
 て。殊文此里ハ由縁ある地れば古々のゆかりあつう。  
 なる。あつうらむも言茶よこせ出。あつう。北の方ハ是を後と  
 んぬら。洋被娘ハ年月よあつう。容貌のあつう。あつう。あつう。  
 むよつけても。被せま。甲の今よ。あつう。あつう。あつう。  
 とつう。あつうの涼あつう。挿ひ目も當が死醜婦と



あり。つが身とて病ひがらみ。那落命の集令ひて。  
 親子主従とありぬらん。前世のつらなる周縁るらんけりや  
 ありぬらん。昔の教る世の中あり。曇りがらるる月日を  
 送りもひるが。其年由短くもとらる。老角ふるうらや  
 派生るるをぞぞるり。北の方のあり月白の鬱と慰さめ  
 めのんとして。雲籠一障子ふひ。妻の気色を  
 見渡し。あまよ。塵つらぬ玉川の流る。垣の外面と  
 らうめ。其根とえせぬやま。彼方此方よ  
 つらるも。海よのり。唱連る蛙の夢の暮れ。春  
 と惜む。あやと。いと哀る。おし。川邊の向ひ。草  
 苧童子の戯とわ。何やん歌。唱る。鄙節の聴る  
 声。音のれども。その章加よ。いと。あるよ。似まれば。

々々 揚屋一々。夢ととらて。咽み。その奇を。夢のよ。  
 八重野。蠶も。橘も。ある。黄金の色と。あを。生る  
 父母。あまの。水よ。気。あま。と。泣く。泣。花。や。る。向  
 汲。と。と。志。玉。の。井

と。探。返。し。く。拍。子。と。ら。く。咽。ひ。け。ま。ば。人。の。夢。と。ま。ひ。く。  
 つら。ゆ。所。謂。あ。る。と。ま。の。章。加。あ。れ。ども。是。の。は。里。の。方。言。や。  
 これ。ども。玉。の。井。と。唱。め。名。あり。ま。よ。近。き。遠。う。よ。あり。ぬ。る  
 せん。覚。来。あ。る。と。あ。け。ま。ば。主。の。徳。太。と。よ。び。く。と。ら。づ。終  
 こそ。の。ひ。け。ま。ば。徳。ま。ま。膝。紙。ま。ひ。て。す。や。か。さ。ぐ。あ。る  
 の。ま。ご。名。よ。井。出。の。玉。の。井。あ。る。と。め。く。あ。る。と。ゆ。や。夫。と。ら



井出の里にそ  
立里と  
さく

山

山



ゆへ又此方の田の中は黒きる裏くらそは先祖諸兄君  
 の傳せのひー館の回跡あゆと教えすのせられん。んく  
 降しゆひつて往々あはれは玉の奴は至りあへんぞ。  
 こまごぞヨのさせり玉の井みくさくしゆとせん。人  
 由あはぬむくのまらう。井筒よとらるるびつ。水底  
 とすそえんあふよ。その海にといつたるうあんとあはぬ  
 清くしるよ。あはれあるう井。んくあはぬ清の既よ  
 井桁を越る。数丈あはく只龍の時とゆ。天は昇るよ  
 ひく。清くと立登る。人ふ大は驚き。女の身を  
 しく。那清浄の名あは近よふとそ。あはれ神の智させよ  
 ろんと。身の毛もさうとあはれ。退んとしゆあはれ

そのあ勢あはる由屏風を倒しかたがとく。娘と挿り  
 立るるび居るあはれ。膝かづけ。あはれ娘のわがうせ  
 るるよ阿といひく。膝かづけ。あはれ娘のわがうせ  
 めふ湯甲撲地と脱落まは。中よあはれ玉枝の橋四下り  
 関け。あ香四方よ薰る。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 挿り顔と見えあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 の焼く。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 し紅面ざあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 藤の方とあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 かだりあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。  
 几帳あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。



玉の井  
きどく  
と  
る

井手玉木

玉の井

九

あつた。今も元氣な感どて姫のうづけるおん甲の脱させ  
又挿が顔の焼疵一点の泣き。生息はるのさす死顔  
とありしあは深き因縁あるものなり。おのひりぐまば  
去年の夏掛山改別が奸事ありし。佐訓梅里の  
籠をおそのま。あは追慕の悪徒原の矢尻を清ん  
こまらるる姫が如く。携しこのおん甲をうちまらる。その  
席口を幸ふとてのぐま。主従三人梅の宮へ落しあはる。  
姫がかげける甲を脱とんととるは深きを洗けしる  
どく。すこしもゆるだ動くところなく。まさるひの殺そひ  
て。るげき悲しき。如。其の前より身ひりり生くおら  
のび。姫が来るをうちらぬらるをうから。まだ移むともなく

社擅のかくは妙なる御声をまらる。戴き甲は手と  
加まら堅く。あは深き時をまらる。三とびおまを  
あひし。あは深き姫も落しあはる。かまら甲の脱さる  
つけて。神の告をおのひあはる。今甲の脱のまらる  
文字よるあは考ぬれば。甲といふ文字よるあは  
加まら押といふ文字とる。又三あをそのまら押と  
いふ文字とる。彼はかんぐあはとれば。姫が被ける甲の  
凡慮の業ありて神の忌せの物あはる。いふよるとも離れ  
まら。只あをゆるの時をまらる。世は忍ぶ身へ傍侍は  
生まらる。らるの離支よりて。あは危難をまらる。ニツあは  
懸想よる人ありし。一ツあは危難をまらる。ニツあは

貞をささぐりめめめめ。梅の宮の神慮めてこそあり  
 けめ。あつるふ今日この玉の弁は近よるとひとく。あま  
 甲を潤し。おのれども祝儀しつらん。弘前の示現空  
 か。殊は今朝し草薙童子唄ふを笑し。八重  
 山吹も橋もあそび黄金の色とらん。あを生るたよりち縁と  
 うさひん。とりも並さよと相生しく。甲を潤し。  
 ちこささ水よけさせれ。泣く泣く消る花やと笑へん。  
 挿が顔の醜かりん。火の泣る。これよあ涙そぐ時を  
 ぬ刺火と相刺し。その顔の焼疵あつ消失ぬらん。  
 相生相刺のあつたあむるあり。今ぞくまむる玉あり。乃。  
 冥驗とらひ苦肉の誠を。天の感應しつらん。ああ  
 りふすれかゝる奇瑞よあめとらん。ひとくは氏祚の守り勢  
 めめ。うぐひる。殊は二岳の御室恙なくこそせめめ  
 ちで。かくしぐりもあつるけしと。三人天地を舞。井を  
 注し飲びし。あつたあそ。徳太奇意の雲晴ま。完る  
 百折千磨の愁ひもつた果。こまららん飲びよのそ向らせ  
 めひるん。いざあせめめひ。祝ひの神酒をさげし。あひ  
 出世を祈りめめひ。移と。家路よあむらん。あつらん。あ  
 宇治の方よりおん先を拂ひせ。あつたあ公々とお守り  
 綱代の裏よる。あつたあ青侍は丁敷多付。祝ひあつたあ  
 め。北の方を。あつたあ。えんまの。あつたあ。遠也國の任を  
 あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。

りふすれかゝる奇瑞よあめとらん。ひとくは氏祚の守り勢  
 めめ。うぐひる。殊は二岳の御室恙なくこそせめめ  
 ちで。かくしぐりもあつるけしと。三人天地を舞。井を  
 注し飲びし。あつたあそ。徳太奇意の雲晴ま。完る  
 百折千磨の愁ひもつた果。こまららん飲びよのそ向らせ  
 めひるん。いざあせめめひ。祝ひの神酒をさげし。あひ  
 出世を祈りめめひ。移と。家路よあむらん。あつらん。あ  
 宇治の方よりおん先を拂ひせ。あつたあ公々とお守り  
 綱代の裏よる。あつたあ青侍は丁敷多付。祝ひあつたあ  
 め。北の方を。あつたあ。えんまの。あつたあ。遠也國の任を  
 あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。あつたあ。







名義雅  
玉名の  
姫

五

十一



梅里此  
鐘  
再真

五

五



月々云々客親族氏族り  
 さればよふくびの間尋とく。月々雲客親族氏族り  
 もひ。強情空一かた。実ある。値遇の全縁とやの。は  
 との。憎みの大に。残る。亦多く。か子ての。互ひ。意を。ひ  
 あ。う。ま。離を。速つ。縁。その。工。ど。あり。一。は。并。被。娘  
 よ。お。う。び。の。ひ。や。ぐ。て。二。方。を。む。ひ。と。せ。梅。里。の。四。州。へ  
 法。好。々。の。都。は。ぬ。り。の。ひ。母。子。は。尋。子。の。ひ。ぬ。る。よ。一。奏。受  
 おん。む。の。ひ。と。糸。を。せ。ゆ。ん。と。と。及。京。一。の。ひ。り。か。く。て  
 志。う。く。べ。おん。の。と。ま。の。の。り。ゆ。べ。都。へ。ぬ。り。ゆ。り。半。速。は  
 獲。一。の。の。べ。と。あり。け。ま。ば。諸。好。々。の。ひ。の。と。家。室  
 と。形。け。の。の。の。と。ん。畏。ま。ま。ぬ。る。月。度。は。秘。め。お。た。ゆ。ん。  
 へ。と。宣。へ。ば。挿。の。と。あり。か。た。と。の。平。伏。し。り。茶。藤  
 の。方。へ。橋。と。甲。の。二。石。を。持。お。の。ひ。は。二。品。の。おん。身。由。孫。を  
 知り。は。る。累。代。の。重。器。の。れ。ば。家。督。は。ま。る。の。能。し。よ  
 磨。り。糸。を。よ。る。の。れ。奇。瑞。崇。ま。し。ま。せ。ば。大。切。は。守  
 獲。一。の。の。べ。と。あり。け。ま。ば。諸。好。々。の。ひ。の。と。家。室  
 と。形。け。の。の。の。と。ん。畏。ま。ま。ぬ。る。月。度。は。秘。め。お。た。ゆ。ん。  
 志。う。く。べ。おん。の。と。ま。の。の。り。ゆ。べ。都。へ。ぬ。り。ゆ。り。半。速。は  
 おん。む。の。ひ。と。糸。を。せ。ゆ。ん。と。と。及。京。一。の。ひ。り。か。く。て  
 法。好。々。の。都。は。ぬ。り。の。ひ。母。子。は。尋。子。の。ひ。ぬ。る。よ。一。奏。受  
 よ。お。う。び。の。ひ。や。ぐ。て。二。方。を。む。ひ。と。せ。梅。里。の。四。州。へ  
 あ。う。ま。離を。速つ。縁。その。工。ど。あり。一。は。并。被。娘  
 との。憎みの大に。残る。亦多く。か子ての。互ひ。意を。ひ  
 もひ。強情空一かた。実ある。値遇の全縁とやの。は  
 さればよふくびの間尋とく。月々雲客親族氏族り

至るやで寿の袖をつらねて。糸入りのひ。樂車へ門前  
 へ又地をあらそひ。その繁昌のまゝのひふたうり。圖  
 ざりきこの人々。そのふやで壽令あるも。今日至りてま  
 陽子むえり。花本にぞく。た孝貞公。あまのま。その藤  
 菱子ぐえよ並びまら。然好々宰相を裁て中納言  
 加清あり。そのまら。主上茶藤袴被のこま。まぞ  
 藤令と憐れむひ。まらびよ婢女挿が真忠と敬感の  
 あまら。改則が茶地と三分あり。その二ツと茶藤袴被  
 よまら。その一ツと挿よりひらみぞ。茶代ゆその例  
 せらる。恵まら。母子のこら。かたけり。ひ  
 又挿が身よあひて。莫大の茶まら。まら。まら。茶

藤の方へ庄園の地をあらそひ。とち。梅のまら。あまら。ひ  
 磋滅悟道寺へ寄附せられ。る。月深岬の毒骨六井の  
 徳太夫と名され。條多の賞令とまら。二人まら。帯  
 刀と免一のひ。その郷くまら。梅里家のひら  
 とぞ唱り。然中白人夫婦が忠死とひ。挿が  
 後公と海賞嘆一のひ。まら。挿と茶藤の方  
 の姪女とまら。龍口の内舎人某が室よ嫁せ。め。ひ  
 西家男女おん子数多あり。目出度富まら。ひ。ぬ。と  
 う。

源氏草紙卷之五終

執筆 鈴木武尚

復ふく雙さう言ごん雙さう又ごん三さん絃せん

蓬洲先生著述 并畫

全

右近日本出——仕以活字等の出林として請求出送る事

文化八年未初秋

東都書林

十軒店

西村源六

江戶小傳馬町	丁子屋平兵衛
心齋橋筋安堂町	秋田屋太右衛門
同 南灸齋	秋田屋市兵衛
同 唐物町	河内屋太助
同 南本町	河内屋平七
同 博勞町	河内屋茂兵衛

京都三條通寺町西又町

丸屋善兵衛



